



第6回

## 鼓童塾

齊藤栄一の太鼓篇

坂本実紀

齊藤栄一の鼓童塾・太鼓編に参加できるのはたった1度きり。集まってくれるのは、太鼓をたたきたいという熱を持った人たちだ。友人同士では参加できず、世代も、出身地や国も違う初対面の老若男女20名が離島の佐渡まで来て研修所で3泊4日をすごす。参加まで不安もあるかもしれないが、集まった人たちだけに体感できる世界がそこにはある。研修生の生活スタイルを基本にし1日がスタートし、身体を動かして、太鼓をたたく。

しかし、この塾の目的は、「太鼓がたたけるようになる」ことではない。鼓童塾は、佐渡での鼓童村の開村と時を同じくして「交流と学びの場」として生まれた。ここで体験できるのは、鼓童の音ではなく「根っこ」の部分だ。

「太鼓の音の聞こえる範囲が一つの村という考え方のもと、僕たちが太鼓をもっていろんなところに行けば、太鼓の聞こえる音の範囲が広がる。塾では鼓童の熱き思ひと一緒に叩くことで感じてもらい、その思ひが音と同じように広がってくれるよう願っている」と、齊藤。プログラムは、研修生と触れあいながら、彼らの生活を疑似体験する形で進む。そこには何年たっても学べる搖るがない鼓童の基礎があるからだ。

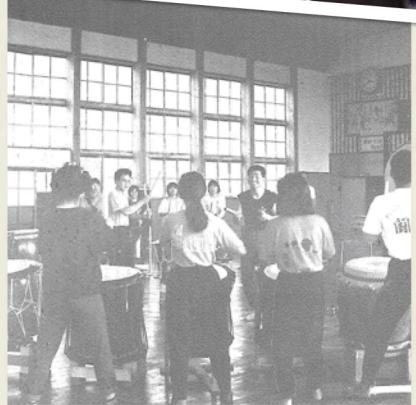
齊藤が長く塾に取り組み続ける理由のひとつに、永六輔さんから言られた言葉がある。「鼓童は日本の太鼓を世界中に広めたけど、世界中に小さい鼓童がたくさんできちゃった。本当は太鼓を広げるだけでなく、理念も広めなければならなかった。でも理念が伝わってないことで、みんながスタイルだけマネしてしまった」齊藤が鼓童の理念を伝えることをより強く意識したきっかけだ。

「塾で渡すのは技術ではなく種。それを持ちかえり、どこかで咲かせてもらう。それが目的」と、齊藤は語る。種とは、「鼓童」の理念や考え方だ。

1989年、鼓童塾がはじまり、齊藤は3年間初代塾長・近藤克次氏のアシスタントを経たあと、1992年から塾長を務めてきた。鼓童塾の期間、齊藤は、塾生の皆さんと、そして太鼓と真っ向から向き合う。内容は、その時の塾生の状況に合わせて変わるため、事前打ち合わせができない。だからこそ、毎回気の抜けないライブに向かうように、齊藤はありつけの「熱」をもって取り組む。「どんな人が来るかわからない中で、みんなが打ちとける様な場所を工夫してつくる。みんなが変化していく様子を見るのもおもしろい。そりゃあもう、濃くなる!」齊藤はそう嬉しそうに語る。

鼓童メンバーの齊藤にとっては、舞台のために技術を研磨し、稽古を積み重ねて太鼓をたたくのが日常だ。そんな中で、この鼓童塾は純粋に太鼓と向き合うことができる貴重な時間。リセットの場、つまり非日常となる。もちろん参加者にとっても非日常だ。頭を空っぽにして太鼓をたたき、太鼓の楽しさだけでなく、いつもと違った自分を発見する。そして、仲間と共に考え、自分の身につきつつある何かを五感を使いながら学びっていく。

塾中、齊藤は、身も心も最前線に立ち、合言葉でもある自身の「熱き思ひ!」を塾生にシェアしていく。「『熱き思ひ!』っていうと何かをやるために一生懸命っていうイメージがある。けど、僕的には楽しく生きるための必要な時間や熱量というイメージ。この感覚ができるだけ多くの人とシェアしたくてやってる」。太鼓は心の壁を取り除くのに非常に有効な「アイテム」だ。人の心と身体の大切な核を引き出し、響かせ、共有することができる。鼓童塾は、鼓童の根っこを体験の中で学び、参加者各々の人生を見つめなおすための時間を齊藤と仲間と共有する場として今後も続していく。



1990年の鼓童塾(北田野浦研修所にて)



鼓童塾2019参加者募集中! 詳しくはp8をご覧ください。